



棚

田

棚田ライターズ

全国棚田・千枚田連絡協議会

第72号 2017.3.25
(年2回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒184-0015 東京都小金井市貫井北町1-145-101

TEL:042-386-8355 / FAX:042-385-1180

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

特集・熊本地震を経て、熊本・大分から



熊本県山都町通潤橋の漏水状況 2016年4月16日撮影



通潤橋の上の被覆土に生じた亀裂。現在も立ち入り禁止が続く



山都町鶴ヶ田 畑の被災状況



山都町柄の木 水路の被災状況



山都町菅 オーナー田も6月の豪雨で土砂が流入

写真提供：熊本県山都町

特集・熊本地震を経て、熊本・大分から

熊本地震と白糸台地の棚田景観

熊本大学政策創造研究
教育センター准教授

田中尚人



1. はじめに

私は、熊本大学工学部社会環境工学科にて、「都市地域計画」の授業を行う一方、熊本大学政策創造研究教育センターに所属し土木史、景観論を専門として、地域の歴史や文化、景観を活かしたまちづくりに携わる研究者、実務家である。本稿の対象地である熊本県上益城郡山都町白糸台地には、熊本大学に赴任して1年が経つた2007（平成19）年から通り続けて、10年目を迎えた。

山都町では、土木史の専門性から、通潤橋（写真1）を含む通潤用水の水路ネットワークの保存や土木遺産としての価値評価に携わり、まちづくりの実務者として、山都町役場と地域住民の協働を促進し、持続可能な地域マネジメントを実践してきた。

2. 熊本地震と通潤橋、 白糸台地の棚田

「本震」と呼ばれる2回目の震度7の大きな地震が起きた平成28年4月16日深夜1時半から、丸4日間が経つた4月20日に山都

には、同地の景観が、棚田としては全国で初めて文化庁により重要文化的景観「通潤用水と白糸台地の棚田景観」に選定された。国選定重要文化的景観（以下、重文景と略）に選定された頃は、まだ「棚田景観の価値」の認知は低く、農家の方々の生活と棚田景観の結びつきは薄かった。

しかし、二次選定（平成21年7月）、三次選定（平成22年2月）と重文景の範囲が広がり、カメラを片手にした来訪者が増えると、農家の方々の中にも「棚田景観」の持つ意味が浸透し、白糸第一自治振興区の『棚田景観プロジェクト』が活動を始めた。

2012（平成24）年10月には、同地をメイン会場に「第18回全国棚田（千枚田）サミット」が開催され、本大会のテーマが「子どもたちへ残そう地域の宝～地域が育み続ける棚田の文化と景観～」であつた。

私は、当時白糸第一自治振興区の女性部長を務めておられた下田美鈴さんが事例発表の中で話された「白糸台地の景観が最初から美しかった訳ではない。最近『美しくしたい』と思う人が増えたのだ」という言葉が今でも忘れられない。

町にうかがつた。同僚の構造工学の先生方が通潤橋の被災状況を調査しに行かれる、とのことだったので、同行させて頂いた。この時僕はまだ、研究者として被災者の皆さんと何を話したらいいのか覚悟ができていなかつた。直前に立ち寄つた造り酒屋「通潤さん」も、歴史ある蔵が半壊し、相当な被害に遭われていた。

通潤橋に到着すると、既にブルーシートがかけられた状態になつており（写真2参照）、文化財担当の方から前震、本震時の通潤橋、通潤用水の報告を受けた。

お話を、『前震』の翌日4月15日の明け方に既に石積みアーチの下からの漏水が激しく、本震後にはもはや通潤橋の中には水が残つていらない状況であることが推察され

た。橋の上面にも何本かの地割れが起つておらず、墳砂も見られた。橋脚部は大きな被害はないものの、側面は天端から5段目ぐらいまでは、はらみ出しも確認できたので、通潤橋の名物である「放水」は平成28年を含め3年間を目途に一旦停止となつた。

通潤橋の觀光放水は単に觀光のためだけではなく、地域固有の文化であることから、この放水の価値を高めよう、とする取り組みが数年前より活発になり、平成27年度に「定期放水」に切り替わつていたことは特筆に値する。白糸台地への配水は代替の管路によつてまかなかれ、白糸台地の稻作へも何とか影響が出ないようだ、とのことで胸をなでおろした。

国指定重要文化財として、通潤橋に相似の復旧方法を検討することを現場で話し、解散となつた。その後しばらくして、矢部地域の地域住民の皆さんが「熊本城の石垣は地震で壊れたけれど、（私たちの）通潤橋は壊れなかつた」と誇らしげに話された、ということを聞き胸が熱くなつた。

しかし、白糸台地の方では、コンクリートブロック、擁壁の崩壊、地割れなど、農地に深刻な被害が出ていた。下田茶園でも、写真3のように、地割れでお茶の木の列がずれてしまつたり、10m以上もの長さの地割れがあぜ道にできていたり、被害は深刻であつた。

熊本地震から2ヶ月が過ぎようとしていた、6月中旬の集中豪雨により、白糸台地



写真1 通潤橋の放水



写真2 通潤橋の被災状況 (2016年撮影)

A photograph of a tea plantation field in Japan. A person is kneeling in the foreground, working in the tea bushes. In the background, there are rolling green hills and a white van parked on the side of a road. The sky is overcast.

写真3 茶畠の地割れ (2016.5.11撮影)

のほとんどの棚田が土砂災害に遭った。地震で緩んだ地盤が、激しく長時間に渡った降雨により滑り、田植えをしたばかりの棚田に土砂が流入した（写真4）。

ほとんどの農家が高齢者を中心としており、後継者もいない、下田さんのお話だと、この6月の豪雨災害で「もう米作りはしない」と諦めてしまった方が、2、3人ではない、とのことだった。

3、農地・農村の復興

地域社会のあり方を問い合わせ抜本的な変革が必要であった。



写真4 棚田の土砂災害（2016.7.7撮影）

2度の地震で傷ついた熊本の地域づくり、ふるさとの復興について語り合つてもらつことを趣旨とした。ここに、矢部高校から食農科学科2年生の2人の高校生と、熊本地震以前から通潤橋を中心とした地域の活性化を活動目標にされている「通潤橋応援プロジェクト」の代表三浦祝弘さん（写真5）にご登壇頂いた。

熊本地震からの復興は、都市でも農村でも10年以上、場合によつては20年かかるかもしれない。私たちはこの復興の過程において、それぞれ10歳から20歳、年齢を重ねるのである。今、16歳の高校生は26歳の若者に、30歳の若者は40歳になり、結婚し終る者の棲家を選んでいるかもしれない。

人口減少 高齢社会を迎える日本において、新しいふるさとのカタチ、地域の文化的景観を読み解き、適切な地域社会を、地域産業を担つていけるだけの子ども、若者、壮年・熟年と多様な人材育成が今後求められることになる。白糸台地の復興は時間かかる。しかし、絶対にあきらめない。

矢部高校の生徒2人も、官民一体となつて取り組む『山都壁』などに参加しながら、地域づくりに参加していると、町の方々から声をかけられるようになり、コミュニケーションのレベルアップをしている実感がある」と語り、山都町が「他の地域にも知られるような、若い世代が活躍できるまち」になつて欲しい。矢部高校が「3校しかない中学校の生徒が、みんな来てくれる、来たくなるような高校になつていてほしい」と発言してくれた。

最後に三浦さんは「（山都町が）外に出で行ってしまった人たちを、取り戻せるような、いろんな働き方ができる地域になるといい」と語り、単に熊本地震から復興する、農業が元通りになる、というだけでは



写真5 三浦祝弘さん

なく、矢部の白糸台地など農業を生業とする地域が、以前のような活気ではないかも知れないが、地域に応じた適切なにぎわいをみせるような地域になつて欲しい、と語られた。

地域づくりと 人材育成

山都町の現場から

熊本県熊本地方は、2016年4月14日震度7、16日震度7の本震に見舞われた。山都町は、震源地から直線で約20kmの距離。約600戸の住居が被災し、現在も町内で20数件が仮設暮らしを強いられている。水道が2週間ストップするなどインフラ被害も大きかった。そして、あの美しい通潤橋もまだ送水が止まつたままだ。2012年、全国棚田サミット開催時に歩いた棚田地域はいったいどうなったのか。現場の生の声をリポートする。（取材・文：石井里津子）

重要文化的景観の白糸台地

「通潤橋を直すのに1億2~3千万円かかるゆうけど、石管をつなぐ漆喰がどんな具合に破損しているか、上をはいでみらんとわかるのです。修理も何年かかるか……」

通潤橋が潤す白糸台地の農家で、白糸第一地区自治振興会の会長、草野昭治さんが話す。

「作付けは、通潤橋の手前に送水用のヒューム管が昭和30年代、県の事業で入つていて、その水でできたんです。でも実は、ヒューム管も継ぎ手が離れて、水が上ががらんようになつていて。応急措置で中に入つて酸素ボンベを背負つて入つてコーティングして、昨年の作付けがなんとかなつた。この春、本格的修理に入りますが、こちらも1億円以上かかる……」

白糸台地の中へ案内してもらつた。いくつもの谷が織り重なるダイナミックな地形だけに、傷跡は大きく痛々しい。被害は、4月の地震だけでなく、6月20~21日の豪雨で拡大した。白糸台地の農地120haのなか

210カ所が地震と豪雨で崩壊していた。
「ここは雨の後、U字溝がくえた（崩れた）。蛇腹のコルゲート管を自分で買つてきて、応急措置ですよ」

棚田の中を黒い管が5mほど通つていた。いざこも地震で亀裂が入り、その隙間に大雨が入り込み、一気に崩落したという。

通潤用水の上井手と下井手は、集落総出

で真つ先に確認した。白糸の通潤用水は隧道も多く、詰まつた土砂を手作業で押し出

していく。通潤用水は何を置いても守らねばならないことをみんなが知つている。

「もともと水がなかつた地域。通潤橋がなかつたら今はい。だから、思いが強いたです。（通潤橋や通潤用水を造つた布田保

之助翁も家に飾つて拝む地域です。みんな水路のためやつたら、何もかんも置いて出でくる。我が家は後回しですよ」

道路や住居など、被害の多さに業者も手が回りきらない。だが、作付けは待つたなしだ。だから、農地はそれぞれが自分で直している。

「約120戸の農家はどこも被害を細かく何力所も受けてますが、灾害認定にかかるのならよか、と自分で手立てを打つてる箇所は多いんです」

そして今回、「高齢化で厳しい上に災害が来て、もうよか」ゆうて、やめる人が出てきた集落もある」と聞いた。

2010年に通潤用水と白糸台地が重要な文化的景観になつたことを機に、大阪の米屋に営業をかけ、販売ルートも軌道に乗つてきていた。白糸台地の棚田米は大阪のデ

パートにも置かれている。2~3年前からは、地域の30代が中心となり、軽トラックで米を東京に売りに行くなど新しい動きもあつた。ここで歩みを止めるわけにはいかない。応急措置が施された農地から、そんな意気込みが伝わってきた。

棚田オーナー制度20年の菅地域

「地震で揺られて、大雨によつて畦畔（法面）の途中から抜け落ちている。こぎゃん落ち方すつとは、地震の影響ですよ」

菅集落の梅田幸雄さん（菅地域振興会長）が話す。地震と雨で棚田が、法面をぼっこりとえぐられ、崩壊していた。

菅の棚田は、通潤橋よりも30年ほど早い時期に、布田太郎右衛門（布田保之助の叔父）が羚羊井手を開削して造られた。これまでも大雨はあつたが、大地震は知る限りない。

「まず音がしたんですよ。14日夜の9時半頃、ゴーッと、まるでトラックが遠くから迫つてくるような……近くに来たと思つたら激しく揺れた揺れた。地震のあとは菅地域内の4集落で連絡を取り合い確認してね。

でも、家にも農地にも気づかない亀裂が入つて、復旧作業して田植えの準備をして、やつと田植えができると思つたら……」

大雨の後、オーナーさんはみんな作業に来て、土砂を出したり。ただ、川砂や山砂が入つたところはそのまま。だから秋の稲刈りは、手刈りのところもありました。



コルゲート管で応急措置をした水路（白糸台地）



上：大规模に斜面が崩れ、田んぼに大量の土砂が流入している場所も
右下：布田保之助翁を祀る布田神社の鳥居も崩れた。修繕は鳥居だけでも
2500万円かかる。ここも重要文化的景観の構成要素の一つ



地震と豪雨で水路が崩れた。コンクリートは昭和40年代に素掘りの土水路から変えたときのまま(峰)



梅田幸雄さんと町農林振興課、棚田オーナー制度担当、荒川真紀子さん。菅は標高約400m。オーナー田は、広い人で250m²。少ない人で73m²と、面積はそれぞれ違う。(100m²=3万5千円)



6月の棚田オーナー田の被害時の写真(菅)。山都町役場提供



地震後の水路の写真(峰)。北村敏文さん提供



上：地盤沈下をしたところは昨年作付けができなかった(峰)
下：全国棚田サミット記念植樹の前で写真右から荒木忠浩さん。北村敏文さん。荒木明信さん(鳥獣害対策部長)

「定住の人が少なくて、祭りのときなど、出て行つた人もオーナーさんも参加して、新しい共同作業ができるんですね。集落も高齢化していますから、都市の人をおもてなしするというのではなくてね。高齢化が何もない理由になるのが怖い。そんな風にしないとね」

「オーナーさんが熊本内で菅の野菜を売る『すげの野菜市場』も、2010年には

熊本市内のオーナーさんの中には、被害に見舞われた人も。自宅が全壊し、オーナーを途中辞退せざるをえなくなつた人もいた。菅の棚田オーナー制度の歴史は長い。1996年にスタートし、20年の蓄積がある。4組が当初からのオーナーで、同じ田んぼで米づくりをしてきた。それだけに思い入れが強い。そんななかでの災害だった。

「定住の人が少なくて、祭りのときなど、出て行つた人もオーナーさんも参加して、新しい共同作業ができるんですね。集落も高齢化していますから、都市の人をおもてなしするというのではなくてね。高齢化が何もない理由になるのが怖い。そんな風にしないとね」

「オーナーさんが熊本内で菅の野菜を売る『すげの野菜市場』も、2010年には

【嘉永福良井手】の峰

「2トン車に幌を被せたくらいの大きさの岩が水路に落ちてきました。道もふさがついて、重機でまず道を造つて水路を全部、地区ごとに歩いて見て回つて。小さめの石が水路に複数落ちこんでいたり。機械が入らないところは、手作業で石を割つて碎いたりしましたよ。地震のときはこれらを取り除くのが精一杯で、亀裂や隙間では気つかなかつたんですよ」

峰集落の中山間地域直接支払協議会会長、北村敏文さんが言う。峰を潤す嘉永福良井手も通潤橋と同じ、布田保之助が手がけたもので、約11kmある。案内してもらうと、水路のコンクリートが一部むき出しになつていて、大量の水が入り込み、崩していた。農地にも、すぐには気づかなかつた亀裂が入つており、いざ水を張つてみると、じやんじやん水が出ていく田んぼもあつたといふ。

「4月14日の地震で半分崩れて、16日の本震でさらに崩れて、田んぼが地盤沈下したんですよ。水を入れてはじめてわかつた。明らかに下がつていて、そういうところは作付けできなかつたですね」

田んぼの持ち主、荒木明信さんが言う。道が寸断され、孤立状態になつていた峰。復旧には、特に役割分担をするわけでもなく、共同の機械や個人のものをみんなが自由と持ち出して、作業していったという。地震のあとは余震も続き、水路のヌキ(隧道)も12~13箇所もあるが、中に入つての確認はできなかつた。長い隧道で100mもあり、中はまつ暗。しかもカーブしており、5月に水を流しながら確認した。

町文化財の金内橋(かねうちはし)。長さは3.1m、幅5.5m、高さ7.4mのめがね橋。昭和8年の改修工事で上部と石垣をコンクリートで補強。大きさは通潤橋について町内で2番目に大きい。



災害を経て、地域が持つ「つながり」の大切さが浮かび上がる。そして、そのつながりをより横へ、より縦へ、伸ばすこと。その重要性が見えてきた。

熊本地震を経験して～芦北町から～

熊本県芦北町企画財政課まちづくり推進係

主事
蓑田真平



15周年記念写真

芦北町は熊本県南部に位置し、海と山に囲まれた風光明媚な地域です。平地は海岸及び河川流域に分布するのみで、町総面積の約80%を山林が占めています。告地区は球磨川沿いの山間部に位置し、江戸時代から変わらない風景を保っている小さな集落です。近年では少子高齢化や若年層の流出が進み、14戸を残すのみとなり、人口の減少が深刻な問題となっています。

議会」が発足し、棚田オーナー制度が始まりました。今年度で17年目を迎えるこの活動は、制度開始時期からのリビーターが多く、都市部と田舎の交流が盛んに行われています。



卷之三

下豊吉さん（64歳）が、『オーナー制度を始めた頃、小さかつた子どもが高校生になつた今でも毎年来てくれる。孫のようにかわいいですよ。』と笑顔で話すように、他市町村在住のオーナーとの交流が地域住民の良い刺激になっています。

4月14日と16日に発生した熊本地震は、震源から約60km離れている本町でも最大



EX-1

協議会を中心メンバーの告が、「オーナー制度を始めた子どもが高校生になつくれる。孫のようにかわい顔で話すように、他市町村在住のオーナーとの交流が地域住民の良い刺激になつています。

4月14日と16日に発生した熊本地震は、震源から約60km離れている本町でも最大

天田が、告地区とオーナーの心のつながりはより強固なものになつたようです。

告地区は「棚田を中心としたふれあいのコミニティづくり」「補助金に頼らない独立した地域づくり」の2つの柱を中心とした地域づくりを目指しています。また、棚田米を原料とした告地区オリジナル焼酎「どんどん告」などの新たな特産品作りにも力を入れています。現在の棚田オーナー制度、耕作放棄地有効活用の取り組みを継続して行い、都市部の方や子どもなどの若年層と、田舎の高齢者の交流の場をさらに拡大して地域の活性化を図つていきます。



※棚田オーナーに興味がある方は下記にご連絡を!

芦北町告地区棚田保全協議会事務局 〒869-5498 葦北郡芦北町大字芦北2015番地 芦北町役場企画財政課内 萩田真平
TEL : 0966-82-2511(252) FAX : 0966-82-2893 E-mail : minoda-sh@town.ashikita.lg.jp

枯れたままの湧水。美しかった棚田の崩壊

熊本県立くまもと文学・歴史館

館長 服部英雄

昨年、熊本地方を大激震が襲つた。4月14日と16日である。14日段階で余震があるかもしれないとの予感はあつたが、生まれ初めて体験したこの大きな地震が、まさか前震と思ふことはなかつた。わたしは熊本に赴任してやつと2週間であつた。熊城の崩壊や益城・西原・南阿蘇へとつづく一帯の被害は大きく報道された。身の回りでもジエーンズ邸や天理教教会のような古い建物がペツシャンコになつて、水前寺の大鳥居も崩落していた。

益城に行けば涙が出て、阿蘇にいければ怖くなる。みながそういう。いくども益城にたつた。軒並み倒壊した家屋にことばを失う。しかし耕地も同等地に被災していることには中々気づかなかつた。益城には田の中を隆起した断層があつて、町の天然記念物に指定されたが、ほかにも棚田の石垣はひび割れが目視できる。その、ひびは農道に続いていた。石垣には崩落したもの多かつた。ひびは幅広ければ50センチにもなつており、漏水は必至で、耕作の継続はできない。

以下に阿蘇地方の状況を、阿蘇振興局に勤務する友人に確認しつつ、報告したい。

南阿蘇、旧白水村と長陽村との間にある塩井神社の湧水は枯れたままで、回復していない。湧水がかかつてていた田に水は行かなくなつたけれど、その水が下の方から吹き出した。そこから下流では、作付けも収穫もできた。湧水から直下の田は耕作できなない。

豊肥本線の立野・赤水間はスイッチバッ

クになつていて、地震前まで、車窓からは良好な棚田をみることができた。立野は阿蘇大橋の落下で大きく報道されたように最大の激震地で、今でも避難勧告地域になつており、住民は大津に仮設住宅を求め、大半が転居して、いまは元の村に人がいない。天気のよい時に様子を見に戻つている程度で、そもそも耕作ができない。

阿蘇大橋の下にパイプラインがあつて、

用水源が対岸(南側)からきていたから、橋の落下で水源が断ち切られた。飲料水もなかつたが、回水路が1月20日に完成。水もたれながら、人もおらず、豊肥本線沿線の棚田はこの1年は耕作放棄であつたし、次の天気のよい時に様子を見に戻つている程度で、そもそも耕作ができない。

セントからは崩土の被害があつた。地割れしたところも多くあつて、水が溜まらないから耕作できない。用排水路も破損している。

大豆、飼料用とうもろこしを栽培したところがある。

阿蘇市でも西方、赤水、狩尾、的石、車帰、長草の耕地被害がひどく、西原村では全体で被害。赤水あたりに広がっている田は、地割れや陥没で、用水路も割れている(写真2)。圃場整備はすでに終わっているけれど、14工区、17工区の被

害がひどい。本来団体営(市町村が実施主体)だつたけれど、修復は県営に切り替えて施工する。区画はいまよりも広くなる。

棚田は南阿蘇村の乙ヶ瀬地区にあるが、棚田の中央に土砂崩れがあつて、田が分断されている(写真3)。

国道57号線およびJR豊肥本線再開のめどは立つていないが、国道は新規北側迂回ルート(トンネルルート)の工事用道路の建設に着手している。道路本線は土地買い上げ交渉の段階。幹線交通路さえも、復旧のスケジュールは示されていない状況で、その両側の耕地の将来像は示されていない。美しかつたあの棚田が蘇生するのか、どうか。見通しはあまり明るいようには思われない。



写真1 南阿蘇村の大規模な山の崩壊では、阿蘇大橋も崩落



写真2 阿蘇市的石地区的地割れ



写真3 土砂崩れで南阿蘇村乙ヶ瀬地区的棚田が分断



別府大学夢米棚田チーム／稻を育て、酒をつくる学生たち

別府大学食物栄養科学部 食物栄養学科2年(別府大学夢米棚田チームリーダー) 鈴木 真希

別府大学は、別府市の鉄輪温泉（観光有名な地獄があるといいです）下の別府湾側に位置しています。2016年4月の地震では、大学の周りの石垣なども大きな被害を受けました。大学のキャンパス内で暮らしている寮の学生も被災し、深夜に避難を余儀なくされました。別府市でも1カ月くらいは余震が続いたので授業にも影響があり、不安な毎日を過ごしました。

2016年12月16日(金)に、別府大学のキャンパスで棚田活動の1年を締めくくる夢米棚田活動報告会の発表を終えました。4月の地震の影響で、予定していた活動が中止になつたりして最初はどうなるかと思いましたが、無事に活動を終えることができました。県や大分農業文化公園の職員の皆様をはじめとするお世話をじつにこの場を借りて感謝いたします。

以下、別府大学夢米棚田チームと1年の活動について紹介します。



田植え



稲刈り



脱穀作業

別府大学夢米棚田チームについて

「農業を知る(発見)、農業で遊ぶ(参加)、自然と親しむ(癒し)」をテーマとしている大分農業文化公園(大分県杵築市)の水田を活動の場として、2010年1月に別府大学の3つの学部(文学部、食物栄養科学部、国際経営学部)の学生と先生がサークル(別府大学夢米棚田プロジェクト)を設立し農業体験に取り組んでいます。

この取り組みは、2009年度に別府大学、大分県、公益社団法人大分県農業振興公社が協定を結び、県下の棚田農村振興公社が協定を結び、県下の棚田



12月16日に行った棚田活動報告会

を守る活動を更に推進するきっかけとなること、また学生に農業に関心を持つてもらい、将来にわたり棚田などの保全活動に取り組んでもらうこと目的としています。

公園内に4段(8a)の棚田を復元整備して、2011年から本格的に活動が始まり、古代米などの栽培や農薬を抑えた米作り、収穫した穀物を利用した新しい食品の開発、大分特産の七島蕷の栽培と加工にこれまで挑戦してきました。

私は、7代目となる別府大学夢米棚田チームの統括リーダーと各学科のリーダーは、事前に活動日の内容をチエックし、資料や作業をまとめてアンケート等の作成を行います。当日は、朝8時30分頃から長靴、軍手などの貸し出しを行い、出欠確認後、大学のバスで30分かけて大分農業文化公園に行きます。

現地に到着すると、大分農業文化公園の職員の方々と打ち合わせを行い、活動を始めます。公園の来場者が飛び入り参加し、学生と一緒に作業を行うこともあります。公園での活動が終了すると、また大学にもどり、使用した長靴、軍手等の手入れを行い、解散します。後日、参加学生は、アンケート方式による活動のまとめを行い各学科のリーダーに提出します。

また、学生は、大分農業文化公園での



「次ページへ続く」

大分農業文化公園入口

夢米棚田活動のほかに、大学の講義「世界農業遺産体験学習」でも、国東半島宇佐地域の世界農業遺産を中心に関育や環境など農業に関わる課題に取り組んでおり、現地での見学研修など様々な視点から農業について学んでいます。今年度は137名がチームのメンバーとして登録してあり、毎回30人以上の学生が活動に参加しました。

「いきなり団子」で復興支援

別府大学食物栄養科学部
食物栄養学科 専任講師

下村美保子



ツク詰めとクッキーの袋詰めを行った後、ラベルに熊本復興支援と手書きして米菓子製造の作業を終了させた。「いきなり団子」100パックと米粉クッキー100袋の完成である。

会場となっている別府公園に到着すると、13時の配布時間を待ちきれない来場者の長い列がバスの前にできていた。早速、先発のメンバーと合流して、1日の「いきなり団子」を配布するとともに、義援金の呼びかけと熊本復興支援の呼びかけに参加した。

2日目も同様に夢米棚田チームは、米粉クッキーの無料配布、義援金の呼びかけ、復興支援の呼びかけに奔走した。この2日間にわたった「おおいたみのりフェスタ」への参加は、学生達にとって自然の怖さ、自然の恵み等、自然について考える活動であった。

別府大学夢米棚田チームでは食物栄養学科の学生を中心にイベント等の活動に合わせた米菓子の開発と製造に取り組んでいる。米の消費拡大と国東半島宇佐地域世界農業遺産や夢米棚田チームのPRに向けた手段の一つとしての試みである。また、日本の食の歴史と文化の原点である米に目をむけ、食物や農業について考え、自然や環境問題の理解を深める教育の一環としての活動である。今回の活動は、大分県が主催する「平成28年度大分県農林水産祭おおいたみのりフェスタ」での熊本復興支援であった。

学生は、自分達にできることは何かを念頭に協議を重ね、来場者への義援金の呼びかけと熊本の郷土菓子である「いきなり団子」・「熊本県産米粉クッキー」の無料配布による熊本復興支援に対する呼びかけを行うこととした。

各学部の学生は、講義の空き時間を利用し菓子の試作および、ラッピングやラベルの作成、配布方法等を検討した。農林水産祭の前日には、調理時間、調理工程、作業分担等についての最終確認を行った。当日は、朝8時30分より菓子製造を開始し、講義の終了した学生から役割分担された作業に取り組んだ。

自らも地震や余震による不安な日々を経験した学生達は、「いきなり団子」のパ



酒をつくる学生たち 〔本格焼酎「夢香米(ゆめ)〕



本格焼酎「夢香米(ゆめ)」

大分県は、お米をはじめとする豊かな農産物を原料とした日本酒、焼酎、ワインなどの酒類の製造で有名です。別府大学発酵食品学科は、3年次に日本酒の製造実習を行っている全国でも数少ない学科の一つです。発酵食品学科の発酵食品製造学研究室では、大分酵母の探索など、酒類の生産に必要な微生物の研究がずっと続いている。

2年前、発酵食品製造学研究室の4年生で夢米棚田チームの学科リーダーを務めた都甲花織先輩が、その年に自分たちが棚田で育てて収穫した古代米の一種の香り米を使った焼酎を思いつき、卒業研究で試作品を苦労してつくりました。次の年に同じ発酵食品学科4年生で夢米棚田チームの統括リーダーだった高橋義樹先輩が後を引き継いで後輩たちと一緒に本格焼酎「夢香米(ゆめ)」のレシピを完成させ、2015年度に藤居酒造株式会社に製造してもらいました。

最初は香り米のみで焼酎をつくりてみましたが、評判が良くなかったので、香り米の量を減らして、黄麹・吟醸酵母を用いて仕込み、芳醇な香りと爽やかな甘さの本格焼酎に仕上げました。

大分県は、お米をはじめとする豊かな農産物を原料とした日本酒、焼酎、ワインなどの酒類の製造で有名です。

別府大学発酵食品学科は、3年次に日本酒の製造実習を行っている全国でも数少ない学科の一つです。発酵食品学科の発酵食品製造学研究室では、大分酵母の探索など、酒類の生産に必要な微生物の研究がずっと続いている。

2年前、発酵食品製造学研究室の4年生で夢米棚田チームの学科リーダーを務めた都甲花織先輩が、その年に自分たちが棚田で育てて収穫した古代米の一種の香り米を使った焼酎を思いつき、卒業研究で試作品を苦労してつくりました。次の年に同じ発酵食品学科4年生で夢米棚田チームの統括リーダーだった高橋義樹先輩が後を引き継いで後輩たちと一緒に本格焼酎「夢香米(ゆめ)」のレシピを完成させ、2015年度に藤居酒造株式会社に製造してもらいました。

最初は香り米のみで焼酎をつくりてみましたが、評判が良くなかったので、香り米の量を減らして、黄麹・吟醸酵母を用いて仕込み、芳醇な香りと爽やかな甘さの本格焼酎に仕上げました。

七島蘭の栽培と加工への挑戦

2013年

5月

30日

の

国連食糧農業機関(FAO)国際会議において国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定されたのを受け、別府大学夢米棚田チームは、大分農業文化公園の棚田の一段を使って七島蘭の栽培を開始しました。

七島蘭は、シチトウ、琉球蘭とも呼ばれ、鹿児島のトカラ列島の古い名前の七島に由来します。七島蘭は、イグサと同様に畳表として使われていました。七島蘭の畳表の琉球畠は縁なしの正方形で、いまでは沖縄でつくれてあります。唯一大分県の国東半島で生産されています。

昭和30年代までは別府湾周辺で盛んに栽培されていましたが、それ以降減少の一途をたどりました。しかし、七島蘭は、1964年の東京オリンピックの際の柔道の畠に使用されていたくらい耐久性の高いものです。

夢米棚田チームは貴重な七島蘭の栽培を始めて3年目を迎えました。2016年、大分農業文化公園で7月10日のシットウの日（注：シットウ、大分では七島をこのように発音します）のイベントで棚田チームは、一般の人たちに七島蘭のコースター作り体験の指導にあたりました。

別府公園で毎年開かれる10月の農業祭でも同様に指導を行い、七島蘭をはじめとする国東半島宇佐地域世界農業遺産についてのPRに努めました。七島蘭のコースター作りは、くにさき七島イ振興会の岩切千佳さんに教養科目の「世界農業遺産体験学習」の授業で指導を受けまし

たが、七島イ振興会の芸術作品のよな加工品を夢米棚田チームの活動でも作つていきたないと考えています。

イグサと七島蘭の香りなどの成分の違いについても、大分香りの博物館と共にで、最新の分析機器を使って現在研究を進めています。

嬉しいことに七島蘭の畠表が、2011年12月に、国が地域ブランドとして保護する地理的表示保護制度(GI制度)に登録されました。夢米棚田チームの活動が七島蘭の宣伝に貢献できるよう、次のリーダーの河野共喜さんに期待したいと思います。

【2016年の主な活動】	
5月 7日(土)	耕播き
5月22日(日)	七島蘭の植え付け
6月 5日(日)	稻の田植え
7月10日(日)	草取り・別府大学生と盛り上げる7.10(シットウ、七島蘭)の日
8月21日(日)	七島蘭刈り取り・草取り
8月25日(木)	中国政府職員への別府大学棚田活動の説明
9月13日(火)	由布市ゆふの丘プラザでの研修会
10月 9日(日)	稻刈り・掛け干し
10月15日(土)～16日(日)	大分県農林水産祭(別府公園)
10月21日(金)	国東半島宇佐地域の世界農業遺産に関する研修会(宇佐市)
10月23日(日)	姫島のジオパークをめぐる見学会と研修会
11月5日(土)～6日(日)	大学祭(石垣祭)
11月13日(日)	脱穀・農業文化公園あ米フェスタ
12月16日(金)	2016年度別府大学夢米棚田活動報告会
12月17日(土)	緒方町の水車、原尻の滝見学と研修会



世界農業遺産に「高千穂郷・椎葉山の山間地農林業複合システム」が認定

宮崎県高千穂町町長 内倉 信吾

平成27年12月15日、高千穂郷・
椎葉山地域の「山間地農林業復合」

スペイン直線距離にして高千穂町が
の滋賀県の琵琶湖に達する程の距
離であり、その水路網が1800
ヘクタールを超える棚田を潤して

また、家畜の排せつ物は堆肥化して田に戻すという理想的な循環

世界農業遺產
高千穗鄉・椎葉山地域

暮らしが世界基準で高く評価され
た結果であります。この改め
の認定は、本地域の暮らしに改め
て誇りを持ち、その価値を見つめ
直か始めた織田さんにおめでたす。

中山間地域に位置する本地域では、作業道が狭く大型機械が入れない圃場が多いため、小規模な棚田での稻作を主体に高冷地野菜や花き、お茶、畜産、椎茸栽培や林業を組み合わせた複合経営が主流となっています。

二地域で農業が悪い中で農林業の
益を確保するため、長い年月を
かけて努力と工夫を積み重ねな
がら「山間地農林業複合システ
ム」が確立されてきたのです。

用水路の管理は、用水路毎の受益者による組合「土地改良区」で行っており、年に4回程度、組合員が「役田」と呼ばれる奉仕作業で除草作業や清掃作業を行っています。

選ばれた棚田が7箇所あります。高千穂町に3箇所、日之影町に1箇所、五ヶ瀬町3箇所です。それ以外の田んぼもそのほとんどが斜面に整備された圃場面積10アール以下の棚田であり、中山間地域に特徴的な景観が広がっています。

その棚田に水を導くのが、農地内に整備された総延長500mの灌渠及び三腹水路である。500mに対して

全国的に耕作放棄地が増える傾向の地域では既立った耕廃田は無く、畠田の景観は保全され続けている。本地域では黒毛和種の繁殖經營が盛んであり、畦や法面の野草、稻わらの多くが繁殖和牛の粗飼料として活用されている。高齢化等による耕作でもなくなりた農家からの若手農家が土地を借りて耕作利用している。

今回の世界農業遺産の認定を機に、先人達が何世代にもわたって築き上げてきた地域資源に改めて感謝し、この地で暮らすことを誇りに感じながら、棚田を含めた素晴らしい農村の景観を守り続けていく決意を新たにしていきます。

高田は言ふて云々。天孫降臨の地として記されており、天孫ニギノ命は、稻穂を播きつゝ天上界から地上に降り立ち、当地に稻作文化をもたらしたと伝えられます。そのことについて馳せれば、当地域は日本稻作文化発祥の地といふべきなり。

世界農業遺産とは「社会や環境に適応しながら何世代にもわたり形づくりられてきた伝統的な農林水産業と、それに関わって育まれた文化、ランズケープ、生物多様性などが一体となった世界的に重要な農林水産業システムを国連食糧農業機関(FAO)が認定する仕組み」。(農林水産省発行パンフレットより)

食と農の文化を受け継ぐ力

熊本県球磨村

取材・文 石井里津子

村の食文化に魅せられて——「勝茶屋」にて

「地元、球磨村にある食材だけでおもてなしです」

球磨川の支流、芋川沿いに建つ一勝茶屋でのお昼ご飯。

籠盛りの中に煮しめ、川魚の甘露煮、こんにゃくの天ぷら、ゆべし(※)、一勝地梨のたれをからめた鹿肉のギョーザなどが品良く並び、

7種の具材が小さく角切りされた「つぼのしゅる」(汁)、「白和え」が器に盛られている。そして大きな葉(ヤマダケ)の上には、色鮮やかな干し柿に、夏豆(空豆)の餡が入ったよもぎ餅。さらに、

「その中でも米は、90代の女性が作んなつたのを使つてると。草取りや竿掛けは、たいぎやあきつかとに、えらかと思う。90歳を超えて作んなつた米は、あ

りがたい。そしておいしかあ。ばあちゃんは、ここに米を納むつとが自慢のタネで『うまか』ゆうと喜びなる。高齢の人の持つてきなつとは、特にうれしか

す。ただ、これがいつまで続くか……。一年一年高齢化しています。若い人がせんでもんね

ます。

か……。

年

は

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か



1:まるで絨毯のようにならんに美しく山を飾る梨の花。
写真提供：球磨村役場

2:最も古い廿世紀梨の原木。便の悪い山の方に植えてあった。この一段上の狭いところに、さらに古い原木がある。今も実を800個ほどつける

3:毎床直さん。「梨はまだまだ可能性がある。日本一を目指せばよか。自指せば必ずしレベルアップする。この毎床の良い環境のなかから良いものを作っていくかないと



年。苗木屋さんから買つて、畑の隅っこに植えたんですね。当時は、田畠に木を植えるなんて大反対され、段々畠の隅にしか植えられなかつた。その最も古い原木は百年以上経つた今も実をつけていますよ

そして大正3年、協造は、宮崎から当時の新品種廿世紀梨を1本抱えて持ってきた。

この原木も今以て健在だ。協造は成功を目指し、隣の人吉市で土地を購入し、拡張するものの失敗。

「協造はそのとき、ブラジルへ出稼ぎに行こうと長崎まで資金稼ぎに行つたそうですが、自分だけの問題ではない。地域のみんながやつていけないか。この土地でやつていける方法はないか、もう一回やってみようと思ひ直し、球磨村へ戻つてきたそうです。これは、協造の実の孫娘である義母から聞かされた話です」

直さんの妻、朱美さんが教えてくれる。明治20年生まれの協造2代の話である。直さんは言う。

「ここはだんだん、畠は狭いし、作業は大変だけれど、排水が良いとです。梨には合うんですよ。しかも昼夜の温度差があるけんですね。味が良くなる」

5mほどの竿の両側に結び、肩で担いで運んだ。

「山の者はいなう（担ぐ）のは慣れている。どつてことない」

朱美さんが言う。「体験は人気があります。特に食関係

と直さんは笑うが、かつては山の下までそれを運び、自分たちで売りに歩いた。梨栽培も最初は2~3人の協力体制からはじまつたが、「梨はおもしろかね。教えてくれー」と集落内に徐々に広がつていつたという。

戦後、集落の梨農家で村名にちなみ「一勝地果実組合」を結成。生産から販売まで自分たちで取り仕切り、共同出荷することに。こうして「一勝地梨」のブランドが確立されていった。

「一勝地梨の成功の秘訣は、集落内に協力体制があつたこと。梨を極め、产地化したことです。梨の選果場は熊本県下で最初。県に補助申請をした際、当時はみかんの時代で梨なんてと笑われたと父から聞いています」

棚田が梨園へと変わつて、いかみようと思ひ直し、球磨村へ戻つてきたそうです。これは、協造の実の孫娘である義母から聞かされた話です」

現在、梨園は集落内に24ha。棚田は江戸時代中期に開削された「毎床溝」が潤してきた。毎床溝は長さ8km、巨岩をくりぬいた数10mの隧道も存在する。

「水路が、後の世に残る集落の生命線だと当時の人はわかつていたんでしょう。水はお金。米を作れますし、生活用水になります。時間かかっても苦労しても、水を得たんでしょう」

朱美さんが言う。毎床溝は地区総出で造られた。集落には協力し合う素地がある。だからだらうか。協造には、「あの人もこの人もみんな幸せになつてほしい、そんな思いがあつた」という。「昔の人はここに住んで守るの

があたりまえ。でも、今は改めで自分のところの価値を言葉にしないと、経営だけ考えるようになつて、かつて背中で覚えたものが伝わつていかない。次の後継者に残す言葉が大切です。しながら次に伝えるようにしないと、壊れていくと思います」直さんの言葉が身に染みた。

感謝がないとすさみます。感謝の言葉が身に染みた。

体験交流館「さんがうら」と松谷棚田



毎床集落がある三ヶ浦地区には、廃校利用の「田舎の体験交流館さんがうら」がある。2011年開所の公設公営の施設だ。

15年からオーナー制度もはじまり、すぐそばの松谷棚田では20

人が、それが地域の資源発掘や発信。そして棚田の再生と観光化、物産品の販売などを手がけ奔走している。

藩だつた。相良藩は700年の歴史を持つ。戦国戦乱の世に巻き込まれず、安定した暮らしが続く中、すざむことなく文化が蓄積してきた。受け継がれた営みが芳潤に薫る村。現代となつて

明治になる前、球磨村は相良藩だつた。相良藩は700年の歴史を持つ。戦国戦乱の世に巻き込まれず、安定した暮らしが続く中、すざむことなく文化が蓄積してきた。受け継がれた営み

まつていた。18名のオーナーが、県内外、名古屋方面からも訪れている。松谷棚田も「さんがうら」の開校によつて、多くの人と地域の価値や魅力を分かち合い、育む場へと変わつてきた。

◎
朱美さんが言う。「体験は人気があります。特に食関係



4:田舎体験交流館さんがうら前で。左は小川聰さん。右は、西良介施設長

5:日本の棚田百選に選ばれている松谷棚田。標高150~250mの斜面に広がる。かつてはヤギを放牧し、除草をになつてもらおうとしたが、脱走が続き、うまくいかなかつたという。写真提供：球磨村役場

和歌山県那智勝浦町



色川地域の棚田

「最初は、こういうところで作物を作つて、有機農業だ無農薬だといい気になつてたんですよ」

目の前に広がる棚田を見下

ろしながら、ある農家の方は続けてこう言いました。

「でも、あるときはつと気づいて。棚田そのものは昔の人たちがとんでもない労力と時間をかけて築き上げたもので、その人たちの苦勞があるから自分が大きな顔をして作物を作つていられる。自分ひとりじゃなんにもできへんやないかと。もう恥ずかしくなつてね、それからには先人への感謝と、こうしたすばらしいものを後世へ引き継いでいかなければあんという思ひが芽生えてきました」

この風景を、そしてふることを、後世に残したい。

それは、棚田再生を含む地域おこしに取り組む人たちの共通の思いです。

和歌山県那智勝浦町は熊野古道や那智の滝、温泉といった観光業、生まれる水揚げ量日本一を誇る水産業の町で、こうした棚田や農山村の風景が一般にクローズアップされることはありません。

しかし、那智勝浦町色川地域は、知る人ぞ知る一ターンのメツカ。一ターンという言葉がまだ生まれていなかつた40年前から移住者の受け入れに取り組み、今ではなんと住民の半数近くを移住者が占めるまでになりました。



那智勝浦漁市場のマグロ



大門坂にて、平安衣装行列

答えば、彼らの求めるものはサービスではない、ということです。彼らは、豊かな自然環境、自分の手でつくる安心安全な作物、自分の居場所はたしかにここにあるのだと思わせてくれる地域と人の存在に、都会に勝る強い価値を見いだしています。

移住者の受け入れは「仲間さがし」だと、色川の人は言います。地域を存続させるという思いを共有してくれる人が来てくれればいい。住むにはそれなりの覚悟が必要ですし、合わない人に無理に来てほしいとは言いません。このようなスタンスで、毎年2組が移住してきます。

さて、そんな移住者と地元

の人たちが一緒になって、約10年前に「棚田を守ろう会」という組織を作り、30数年もの間休耕していた棚田を復元しました。40aという小さな面積に80枚もの棚田が積み重なつていて、傾斜がきつく、機械が入らないため、手作業で米作りをしています。農薬を使わないで雑草も人の手で取ります。こうした昔ながらのやり方は、結果に見合はない大変な労力がかかります。今もなお、その姿をとどめる棚田は、風景や文化以上に、それを後世に残したいという「今の人々」の思いが結実したものもあります。

（那智勝浦町役場 觀光産業課 農林係 橋爪卓郎）

事務局コーナー

事務局・
佐賀県玄海町
からのお知らせ

Hコブロ2016で 棚田のPR活動



次回棚田サミット開催地の長崎県波佐見町のステージ

平成28年12月8～10日、日本経済新聞社主催で東京有明「東京ヒットサイト」を会場に約700団体が出展するエコブロ2016が開催され、当協議会を含めた14団体が「日本の棚田」共同展示コーナーで出展しました。会場には3日間で17万人程の来場者があり、各ブースでは棚田で獲れた天日干しの棚田米や、地元特産品のPR・販売を行いました。棚田のPRに努めました。



お寿司づくりの体験



クイズラリーの様子



たくさんの小学生たち



平成30年棚田サミット開催地長野県小谷村のブース



千葉・鴨川で生まれた創作バレエ～里舞～

各出展団体趣向を凝らし、来場者と共に地元のお寿司づくりの体験や、ご当地のゆるきやらも登場し、大いに盛り上がりました。初日最後のミニステージでは、事務局として当協議会の活動概要など簡単にですが、ご紹介させていただきました。

さて、次回の全国棚田サミットは平成29年9月28日～29日に長崎県波佐見町で開催されます。石垣を築いた歴史ある棚田と波佐見焼が魅力の波佐見町で、皆様とお会いできることを楽しみにしてあります。



平成29年2月1日、棚田振興議員連盟総会が開催され、中島峰広早稲田大学名誉教授と岸本英雄本協議会会長（玄海町長）が参加しました。棚田振興議員連盟は、超党派で結成されており、会長に自民党的鶴保庸介参院議員、事務局長に自民党的古川康衆院議員が就任されました。総会では、今後の全国棚田サミットへの参加や、日本の棚田についての意見交換がなされました。

会員募集中

新しく会員になったみなさま

＜個人賛助会員＞山口俊一（東京都千代田区）
古川 康（東京都千代田区）

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織
全国棚田(千枚田)連絡協議会
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局
玄海町役場 産業振興課

〒847-1421 佐賀県東松浦郡玄海町大字諸浦348番地

TEL:(0955)52-2199

FAX:(0955)52-3041

ホームページ：パックナンバーをすべて掲載

全国棚田(千枚田)連絡協議会

検索

編集後記

2017年3月11日は、東日本大震災が起きて6年目。東北の復興もまだ半ばというのに、2016年4月14、16日に九州で熊本地震がきました。10月21日には鳥取中部地震。熊本では、6月の豪雨で災害が拡大し、鳥取ではこの冬、例年ない大雪に見舞われました。いまや日本中どこで災害が起きるかわからない状況ですが、みんなで力を合わせて苦境を乗り越えていければと思い、今回の特集を組みました。どうぞ各地域へ、心を寄せたり足を運んでみてください。地域に根付く底力に勇気づけられます。

石井リ津子

発見!
棚田演出力

キャンドルライトイルミネーション in あらぎ島 Vol.10

和歌山県有田川町清水 2016.9.6



毎年9月6日の夜、たった2時間ばかり重要な文化的景観のあらぎ島が1700本の灯りで彩られる。和歌山県有田川町清水にある舌状型の棚田、あらぎ島で行われる「キャンドルライトイルミネーション in あらぎ島」だ。

地元有志で結成した「紀清の集い」(織本靖弘会長)が主催し、10回目を迎えた。

有田川町清水は、秋篠宮妃紀子さまの曾祖父の出身地。悠仁親王殿下が1歳の誕生日(9月6日)を迎えたとき、あらぎ島の景観を「バースデーケーキに見立ててお祝いしよう!」とはじめた。高さ140cmほどの竹とうろう1700本が棚田ケーキを飾る。

観覧場所は、対岸の三田展望所。そこから今年の文字「秋・拾・米」が読めるよう川岸にも灯りを配置する。前回は直前まで降った雨で川が増水し、文字を急きよ撤去。また6年前の紀伊半島豪雨の際は、開催を見送った。10回目を祝うこの日も午後からどしゃぶり。しかも稻妻。雷鳴が山に轟く。だが、どんな祈りが天に通じるのか、開催前にはさあっと上がつていた。

ここには、紀清の集いのメンバーそれぞれの得意分野が生かされている。足場を組んで張った特設テラスも、ワイヤーを使った滑車による点火装置も、出店も。彼らはプロの仕事人の集合体だ。木材業に建設業、商工会職員、料理人、町議、公務員……。

この日のために総勢120名のボランティアが活躍。当日は棚田のなかで点火スタッフ60名がスタンバイ。展望台から滑車で届けられた灯りを受け取り、次々に点火した。誰もがほんの一時の輝きを分かち合い、愛である。

「もうそくが1700本あるということは、1700年続けるんですか?」

「考えてなかつたな。続くと言えけどな」

男前な紀清の集いのメンバーたちは、気付く笑っていた。

10周年を記念して、45秒の吹き上げ花火10本が



毎年100本の孟宗竹を新たに切る。竹とうろには四角く窓を開け、そこにガラスコップに詰めたろうそくを入れる。文字は、かぐや姫型ともいうべき、竹を斜めに切ってろうそくを入れる

(取材・文: 石井里津子)